

「風の盆」を通して見た八尾町の地域と住民の関わり

長尾洋子

づき、調査結果を考察することとした。

1. はじめに

経済・情報の多極化が求められている現代において、地方の活性化や地域社会の見直しが注目されている。そのような過程の中で、生活空間としての地域社会に対する、人々の愛着はどのように形成され、受け継がれていくのであろうか。「祭り」は、地表に展開された地域というものに、歴史・伝統・人々の連帯・精神的昂揚などの意識上の奥行を与えており、その奥行が深いほど、住民は地域に対して確固たる愛着を持っていると筆者は考える。本論考は祭りを通して愛着の実相を把握し、その形成過程と変容のプロセスを追うことを目的としている。

「愛着」という言葉については、住民が地域に対して持っている肯定的・積極的な意識だけでなく、否定的な感情を伴う「しがらみ」、状況によって意味が変わり得る「こだわり」といったものを包括する、人と地域の関わり方の意識を指して用いることにする。

「祭り」はこれまで民俗学、社会学、人類学等の領域でしばしば取り上げられてきた。特に都市の祭りを対象とした研究では「祭礼」に焦点をあて、現代の社会や文化の在り方、地域構造の変容などを明らかにしようという試みがなされている。これらの研究はほとんどが氏子集団を基軸として執り行なわれる、神事を含んだ祭りを対象としてきたが、本論文が対象とする「風の盆」は、神事を伴わず、むしろ民謡の祭典というべき性格のものである。従って、行事としての「風の盆」と並んで伝統芸能としての「おわら」にも注目した。

また、従来の研究では、集団による参与観察という手法をとり、祭りに関する人々のあらゆる行動を体験的に記録し、詳細なデータ・観察結果をもとに分析することによって成果をあげた例が多い。しかし今回は調査者が単身ということもあり、本論文は主に1993年8月3日から9月5日までの現地滞在で得られた聞き取り調査と観察に基

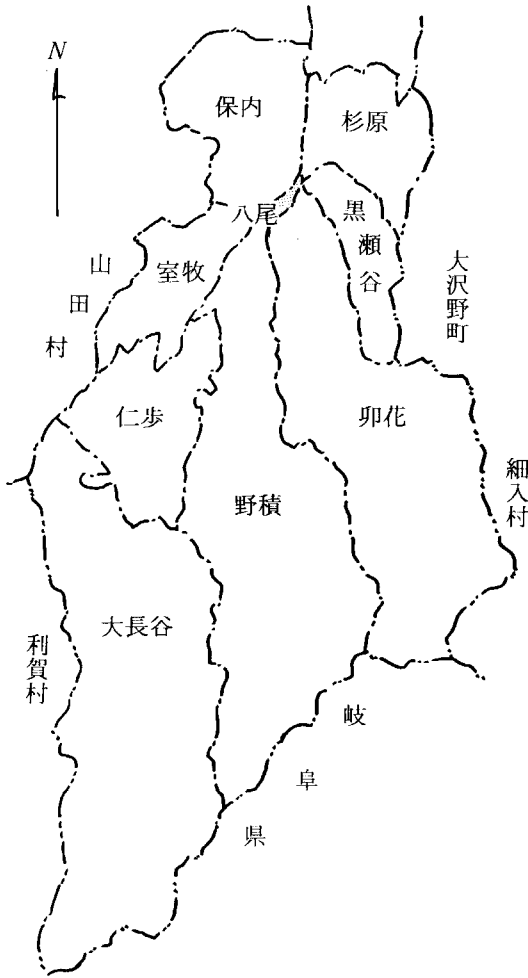
2. 八尾町と「風の盆」

八尾町は、富山県中央部南部に位置し、岐阜県境から続く山地と、富山平野の南端をなす平野で構成されている。面積は236.86km²で、東西12.2km、南北28.68kmにわたる菱形をしており、山林・原野が84.8%を占める。飛騨山脈の支脈にあたるこの山岳丘陵地帯からは、室牧川・野積川・久婦須川・別荘川が北流し、流域の山腹に河岸段丘を形成している。これらの支流は町の中央部で合流して、神通川の支流である井田川となってさらに北流し、北東部一帯に沖積層を形成して富山平野の一部となっている。

現在の八尾町は、昭和28年と32年の合併を経て成立したものである。本論文では合併前の町・村の区分を尊重しつつ、自然条件と歴史的背景、産業構造の違いから、八尾町を大きく平野部・旧町部・山間部（第1図）に分けて論ずる。

「風の盆」の中心的な舞台となる旧町部は、井田川の東南の河岸段丘上に位置し、山地と平野の接点にあたる10町内から構成される。旧町部は聞名寺の門前町として発達し、寛永13年に加賀藩から町建ての許可を得て成立してからは、和紙・蚕種・炭といった山間部の豊かな産物の集積・交易の地、そして飛越の交通の要衝として繁栄した。山間部には、卯花・室牧・黒瀬谷・野積・仁歩・大長谷地区が含まれる。平野部は主に藩政初期に行なわれた大規模な新田開発の進展に伴って人が住みつくようになった地域で、保内・杉原地区から構成される。

明治以降も地場産業が経済的に成立していた段階では、以上のような地域の特徴を引き継いできたが、生糸・養蚕の国際競争力の低下、エネルギー革命による炭の需要の低落、洋紙の普及による和紙生産の減退など、地場産業の衰退に伴い、八尾町は次第に経済力を失い、交通の要衝としての重要性も低下していった。第2次世界大戦中、



第1図 八尾町は9地区からなる。1地区は、合併前の各町村にあたる。この論考では、八尾地区を旧町部、杉原・保内地区を平野部、その他の地区を山間部と呼ぶ。平野部と山間部を合わせて、近隣地区と呼ぶこともある。

生糸の輸出不振が一層深刻になるとともに、それまで伝統産業を支えてきた桑畑や楮畑が食料増産のための芋畑に変えられ、八尾町の経済活動は決定的な転換を迫られることとなった。

戦後二度にわたる町村合併を経て、高度成長期を迎えた八尾町は、山間部から平野部への人口移動が進み、工業・商業の中心も富山平野方面へ重

心を移すようになった。山間部では林業が衰退し、発電所の設置、道路網の整備など産業基盤の整備が行なわれて過疎化と高齢化が地域を蝕む一方、平野部では工業団地の開発や大型店舗の進出が相次ぎ、八尾町の経済を先導している。旧町部は山間部に遅れて人口流出を経験するが、「曳山祭り」や「風の盆」に代表される藩政以来の成熟した町民文化を前面に押し出して、地元の文化活動の拠り所として機能しつつ、観光産業推進という形で地元経済への貢献の可能性を模索している。

「風の盆」は民謡「おわら」の祭典というべき都市の民俗行事である。現在では9月1日から3日の当日に加え、8月20日から十一夜にわたって前夜祭が、さらに7月末から8月半ばの金曜日と土曜日には「おわらナイト」が催されている(第1表)。

「おわらナイト」は平成4年のJapan Expo in Toyamaの継統事業として県から予算が出ているもので、商工会が主催する、いわゆる「町おこしイベント」である。前夜祭は各町内が一晩ずつ持ちまわりで行なっており、増えすぎた観光客を分散させる目的で昭和57年から始まった。当日は9月1日午前0時から9月4日夜明け前までを指す。この期間中、「風の盆」の舞台となる旧町部と福島はさながら昼と夜が逆転したようになる。つまり「おわら」の演奏は夜になって一際盛り上がりを見せる。1・2日目には競演会が行なわれて各町内が小学校のグラウンドに設置された舞台で芸を競う。また、3日目にはのど自慢大会が催され、八尾町外からの参加者が「おわら」で育った地元の人々を前にのどを競う。それ以外の時間は、町内ごとに隊を組んで演奏したり踊りながら町を練り歩く。または町の辻々に設けられた踊り場で演技をする。この行事のクライマックスは「自分たちのおわら」の日、すなわち3日目の深夜に、気の合う者どうして町中を練り歩きながら自分たちの演奏に陶醉するひとときである。

「風の盆」の運営主体となるのは、旧町部の各町内・福島の壮年層である。これらは自治体からの委託事業として、八尾町の助成金・自治会費の一部・寄付金などを運用して行事を運営している。各町内・福島はそれぞれが自立した運営主体であるのと同時に、郷土芸能としての「おわら」の保存・育成に携わる「富山県民謡おわら保存会」の

第1表 「風の盆」の進行

【おわらナイト'93】

八尾町商工会主催， 8：00－9：00PM

	支部	会場
7月30日（金）	福島	福島納涼夜店会場
31日（土）	福島	福島納涼夜店会場
8月6日（金）	東町	東町通り
7日（土）	西町	西町通り
13日（金）	上新町	上新町通り， 曳山展示館前広場
14日（土）	上新町	上新町通り， 曳山展示館前広場

【前夜祭】

8：00－10：00PM（7：30－10：30PM 交通規制）

	支部	会場
8月20日（金）	今町	聞名寺境内広場
21日（土）	上新町	上新町通り
22日（日）	福島	福島駅前通り
23日（月）	諏訪町	諏訪町通り
24日（火）	西町	西町通り
25日（水）	鏡町	鏡町通り
26日（木）	天満町	天満宮広場
27日（金）	東新町	若宮八幡社広場
28日（土）	東町	東町通り
29日（日）	下新町	下新町通り
30日（月）	西新町	西新町通り

【「風の盆」当日】

9月1日（水） 0：00AM－風の盆を待ち望んでいた愛好者が町流し（夜流し）を始める（地方のみ）。夜中の2，3時頃まで続く。

3：00－11：00PM

①各町内の踊り場での輪踊り・町流し

②競演会（7：00－9：00PM 八尾小学校グランド競演場）

出演：福島・諏訪町・西町・東新町・今町・上新町

深夜 愛好者による町流し（夜流し）

2日（木） 3：00－11：00PM

①各町内の踊り場での輪踊り・町流し

②競演会（7：00－9：00PM 八尾小学校グランド競演場）

出演：鏡町・西新町・天満町・東町・下新町

深夜 愛好者による町流し（夜流し）

3日（金） 1：00PM－ おわらのど自慢コンクール（社会体育館にて）

7：00－11：00PM 輪踊り（各町内）

深夜 愛好者による町流し（夜流し）

↓

4日の夜明け前まで。日の出とともに終わる。

第2表 「風の盆」「おわら」にみる八尾町のダイナミズム

I 形成期 旧八尾町の形成と 「風の盆」の起こり	江戸時代～ 明治30年代	1636 旧八尾町開町 1702 「おわら」の町練りが始まる 1770 八尾町縮方条数書 1830-1843 (天保年間) 旧八尾町独特の町並みが形成される 1873 新暦の採用にともなう9月1日から3日を「風の盆」とする 1889 10町内が揃う 1898 エンナカができる
II 展開期 「おわら」の洗練と 「風の盆」の成熟	明治末～昭和初期	〈おわらの洗練〉唱法の確立、鼓弓の導入、歌詞の整備・創作、踊りの振り付け 大正初期 明治座ができる 1921 (大正9) おわら節研究会発足、おわら大会が始まる このころから町内毎の町流しが始まる 1929 (昭和4) 越中八尾民謡おわら保存会発足 町内・保存会で衣装を作り始める 1935 (昭和10) 聞名寺にて競演会始まる
III 安定期	昭和10年代～ 第2次大戦	
IV 開放期 より開かれた参加	終戦～昭和30年代	1948 (昭和23) 聞名寺にてのど自慢大会始まる 1951 (昭和26) 富山県民謡おわら保存会と改称 1955 (昭和30) おわら保存会福島支部の発足 1958 (昭和33) 富山国体のマスケームに出演。 売春禁止法→芸妓及び娼妓貸座敷免許地廃止 1961 (昭和36) 町営グラウンドに競演会場を移転
V 分割期 地域的分断と町内おわらチームの細分化	昭和40年代～ 昭和50年代前半	平野部の成長と山間部の過疎化→旧町部や「風の盆」に対する反発・無関心 年齢階梯制の確立と新しい演技の模索 1973 (昭和48) おわら風の盆行事運営委員会発足
VI 活用期 芸能や祭りの機能を生かした地域活性化の試み	昭和50年代後半～	1982 (昭和57) 前夜祭始まる 1983 (昭和58) HOPE計画推進事業 1985 (昭和60) 曳山・おわら会館オープン 1986 (昭和61) 諏訪町通りが日本の道百選に選ばれる 1989 (平成1) おわら風の盆行事運営委員会役割強化 1991 (平成3) 正間トンネルができる。町でおわらの衣装を作る 1992 (平成4) おわらナイト始まる、禅寺橋ができる 1993 (平成5) 小学校改築

支部でもあり、また行政・経済諸機関から構成する「おわら風の盆行事運営委員会」にも属しており、それらが主催する練習や会合に出席する。そのほか、楽器演奏者・歌い手（地方と呼ばれる）は年間を通して週に1回程度、自主的な練習の会を持っている。

3. 「風の盆」・「おわら」にみる八尾町のダイナミズム

「風の盆」の主要な舞台は旧町部と福島だが、これは面積からいうと八尾町のほんの一部にすぎないし、各町民にとっても年齢や性別・立場によって祭りへの関わり方は大きく異なる。この点を踏まえた上で祭りを「住民の地域に対する愛着が具現化されたもの」として捉え、祭りの歴史的な移り変りに注目することで愛着の形成と変容過程が映しだされるのではないかと考える。このような視点から現在の「風の盆」に至るまでの経過を6つの期間、すなわち形成期・展開期・安定期・開放期・分割期・活用期に区切った（第2表）。本論考ではとくに、八尾町を構成する平野部・旧町部・山間部がこれらの期間を通してどのように関係しあってきたかを中心的に論じる。

(1) 形成期——旧八尾町の形成と「風の盆」の起こり

江戸時代から明治30年代にかけて、旧八尾町（昭和24年合併前の八尾町を指し、旧町部に相当する）が形成され、防火や自治など便宜上の必要性から町内組織という社会的枠組みの原型が出来上がり、「風の盆」が始まった時期である。同時に石垣やエンナカ（道の両側にある防火用水）といった生活の知恵の産物が「風の盆」の舞台装置として整備されていった期間でもある。形成期では町の成立から拡大にいたる過程、住環境として整備されていく過程において人々の空間認識が形作られていったので、この点に注目して「風の盆」の舞台装置としての八尾町を捉えてみたい。

旧町部は、町方の伝統を受け継ぐ二大行事（曳山祭り・風の盆）において、近隣地区との境界さらに町の内部における領域性が顕在化する。だが、この領域は固定的なものではなく、最初の町建て以来250年の歳月をかけて形成されたものである。旧町部における10町内（第2図）はそれぞれが〇〇マチと呼ばれていることから分かるよ

うにそれぞれが町建て許可を受けて成立した。第3表はその歴史をまとめたものである。このような町の成立と拡大の歴史は現在も路地の配置や夜警の順路などに名残を留め、歴史的に火災には敏感だった町衆の心理が見て取れる。江戸時代以来、町内ごとに各家（あるいは何軒か組になって）が回り持ちで毎晩夜警を行ない、火災が起こったときに延焼を防ぐために町内の境には路地が設けられている¹⁾。

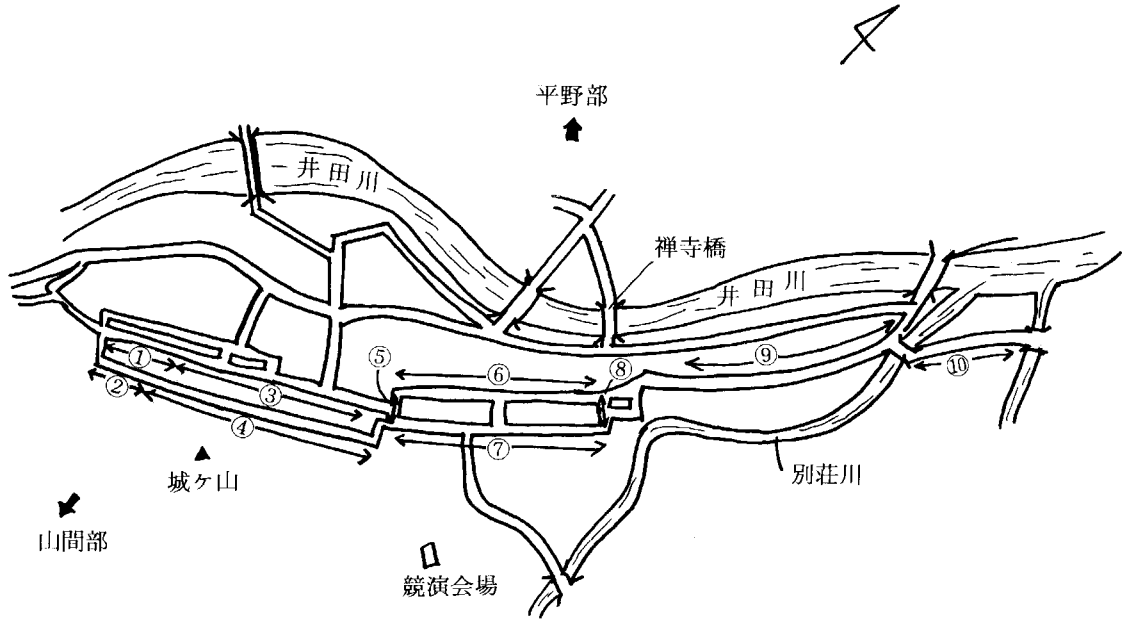
このように町内は非常時の自助組織として機能した一方、自治組織としても機能した。これは1町内が1行政区として機能している現在も同様であり、「風の盆」のための費用も、町会費や寄付という形をとって町内ごとに集めている。

次に、町内の内部の境界性に注目してみよう。どの町内も町建てがなされた当時の通り（本通りにあたる）は必ず夜警をしているが、いくつかの町内では後に町の拡大に伴って家が建てられた区域が独立した順路を回っている。これらは総じて井田川岸に向かう斜面、あるいは本通りから一段下がったところに位置している。例えば上新町5丁目は第2次大戦後に家が建ち始めた区域で、曳山も巡行されなければ、「おわら」の演奏グループもほとんど通らない。それなのに、これらの行事の経済的負担を等しく負わなければならない、不満を感じている住民もいる。

以上は旧町部内部の領域性が、町の形成史との関わりでどのように「風の盆」に表れるかを概観したが、次いで旧町部と近隣地区について検証することにする。

第一に、風の盆行事の由来に対する意識が旧町部と近隣地区では全く異なる。近隣地区（特に山間部）でも9月1日から3日を「風の盆」・「風の祭り」・「フカンド（不吹堂）の祭り」として農作業を休む習慣があり、季節、農事の節目として認識されているにすぎない。ところが旧町部では、町の起源に関わる事件が発端となって「風の盆」が始まったとされる言い伝えがあり、この行事はいわば「創世神話」とともに住民に認識されているのである。

第二に、エンナカと呼ばれる防火用水と独特の家並みが旧町部の“町らしさ”を演出し近隣地区とは一線を画している点に注目してみよう。昨今の「風の盆」は、深夜も観光客で溢れかえり騒々



第2図 旧町部略図（「越中おれら社会学」に基づき作成）

細矢印は、各町内の本通りの範囲を表す

- ① 西新町
- ② 東新町
- ③ 上新町
- ④ 諏訪町
- ⑤ 鏡町
- ⑥ 西町
- ⑦ 東町
- ⑧ 今町
- ⑨ 下新町
- ⑩ 犬満町

↑: 新町本通りと井田川に挟まれていた部分が上新町5丁目にあたる。

しさを増しているが、これを苦々しく思っている町の人々がきまって懐かしむものがある。それは、エンナカの水音を背景に雁木が低く張りだした二階屋の間をはしる狭い通りを、闇の中、静かに「おわら」を演奏していくという独特の情趣である。

エンナカは、明治8年の大火以来頻発した火災への対策として明治31年野積河から取水して旧町部全域にめぐらせた防火用水である。これは道の両側において、生活用水・流雪溝としても機能し

てきた。現在は道路拡張や一部の暗渠か、流雪溝としての整備などの変化を経ているものの、水音を絶やさないことには変わりがない。

通りに隙間なく建ち並ぶ間口の狭い二階屋の家並みは、天保年間（1830～1842）に形成された。それ以前の町建てで当時から文化文政の頃までは「間口広く、奥行短く、建方は低く作り、屋根は板葺かわら葺」²⁾であった。ところが異常気象による農作物の不作や蚕の病死などで人々が困窮し、打ち壊しや百姓一揆が頻発した天保の時代、

第3表 旧八尾町の形成

1636	東町・西町
→	成立後、中町（聞名寺周辺）が今町と命名される
1664	南新町
1661	南新町取り潰し
1672	鏡町（本鏡町）
1677	下新町
1690	上新町
1745	諏訪町
1793	西新町・東新町
(1798	川窪新町：小長谷村領内，掛畑村役場)
1872	茶畑町
1874	茶畑町が鏡町に編入
→	本鏡町と区別されて「新建」と称される
1889	川窪新町が八尾町に編入
1890	川窪新町が天満町と改称
1899	鏡町に芸妓および娼妓貸座敷免許地ができた

(八尾町史，統八尾町史より作成)

八尾町も経済的な打撃を受けた。そのうえ、儉約を旨とする藩の諸制度改正に伴って町人に対しても軒別に上納金が課せられたのである。上納金の額は間口の広さによって決まっていたので、今で言えば税金対策のために、大きな屋敷は二軒または三軒に仕切って貸家とし、いかにも貧乏そうに作りかえ、これが習慣となって間口が狭く奥行の長い家屋がその後建てられたのである³⁾。このように生活の知恵から生まれた家並みではあるが、その視覚効果・音響効果は野外で演奏を楽しむ町民にとっては不可欠の舞台装置となったのである。

(2) 展開期——「おわら」の洗練と「風の盆」の成熟

旧八尾町の社会的な枠組みや「風の盆」の舞台装置としての町のたたずまいが出来上がったのち、明治末から昭和初期にかけて「おわら」の様式が現在行なわれている形へと急激に変化した時期である。また、「越中八尾おわら保存会」（現「富山県民謡おわら保存会」の前身）が発足し、町内単位で揃いの衣装を作って町流しを始めたのもこの時期である。

いつ誰が作ったとも知れず、素朴に歌い継がれてきた「おわら」は、明治末から昭和初期にかけて歌・踊り・楽器の各要素において大幅な改革を経て、芸術民謡と讃えられるまでに洗練された。このことによって、「おわら」は八尾町固有のものとしてより特別な意味を持つようになった。つまり単に故郷の民謡というだけでなく、それが格調高く高度な技術を要する、また（しばしば旧町部のみを指して）八尾の人間でなければ本当の「おわら」は出来ないといったようなこだわりにつながるような形で洗練された。

このように民謡「おわら」の洗練が進む一方、行事である「風の盆」については「観る—観せる」という都市の祭礼が必然的に持っている側面が住民に意識され、競演会という形で独立した。そしてこの競演会が町内対抗という形を含んでいたために、「風の盆」での町内単位の行動の発端となったのである。それと同時に、競演会用に各町内特有の衣装や青年男子の着る町紋のついた法被が作られ、その人がどの町内に所属するかを確認する機能をもった。

(3) 安定期

昭和10年代から第2次大戦前まで、形成期と展開期を受けて形を整えた「風の盆」が行なわれた時期である。山間部・平野部・旧町部の伝統的なつながりを背景とした旧町部住民と近隣地区からの見物客との交流、旧町部ならではの町並みでの町流し、御堂の縁側での演技の美しさはもちろん、赤い提灯を連ねた渡り廊下に退いていく踊子の姿が今でも語りぐさとなっている聞名寺での競演会など、「風の盆」の古典的な情景が完成されたという意味で、安定期として位置付けたい。

しかし、時局は戦争へと向かい、青年がつぎつぎと戦地へ送られ、地場産業をささえた桑畑や楮畑が食料増産のため芋畑になるなど、町を取り囲む環境は激変し、昭和19年、20年には、「風の盆」は中止となった。

(4) 開放期——より開かれた参加

終戦から昭和30年代、高度成長期以前までの時期にあたる。「風の盆」への参加対象者が拡大し、町内ごとのおわらチームの性別・年齢階級に基づく細分化の基礎となった。さらに、昭和28年と32年に町村合併が行なわれ、山間部・旧町部・平野部の関係が大きく変化するきっかけになった時期

でもあり、旧町部以外の人々の参加や「風の盆」の地域的拡大がおこった。

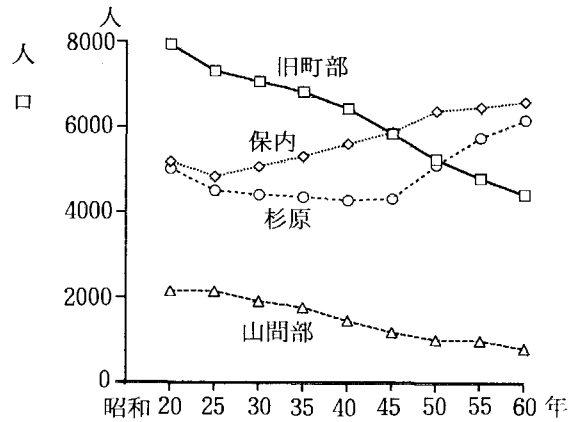
① 旧町部以外の人々の参加

戦前は、旧八尾町と近接する村（現在の近隣地区にあたる）は交流が活発だったから、村から町に「風の盆」を見物にきたり、歌い手として演奏集団に加わったりと、比較的自由的な関わり方をしていた。ところが、旧町部でより広い社会層・年齢層に参加機会が開かれるようになったのと平行して、旧町部以外の人々が公式に「おわら」や「風の盆」に参加するようになった。たとえば、昭和23年に始まった「おわらのど自慢コンクール」では、町外の人々の応募枠が設けられた。また、昭和33年の富山国体では、第二次合併後の八尾町全体で練習して「おわら」に取り組み、マスケームに出演した。「風の盆」以外でも、町民の連帯を促進するための全町あげでの運動会がこの時期に行なわれていたことなども考え合わせると、開放期は合併を経た八尾町全体が統合しようというエネルギーに燃えていた時代だったと判断できる。

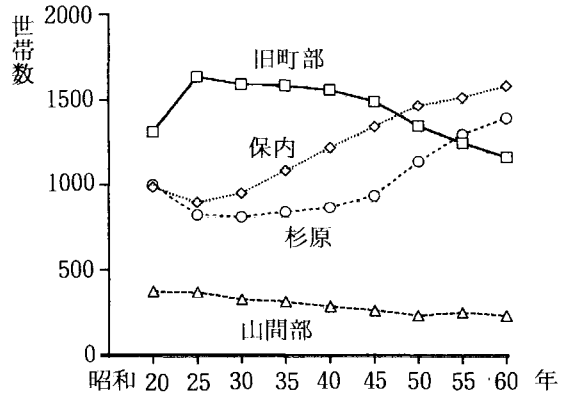
② 地域的拡大

昭和30年に旧町とは井田川を挟んで接している福島が「おわら保存会福島支部」を発足させ、「風の盆」に参加することになった。福島は平野部の保内地区内にある。開放期にあたる昭和30年代には、他の地区は人口・世帯数ともに漸次減少しているにもかかわらず、保内地区だけは増加している（第3図および第4図）。これは、駅前通りとその周辺の発展・町営住宅の大量建設・工場の誘致・役場庁舎の移転に伴う諸官公署の建設などを背景としている。

福島は8の行政区で構成されており、商店と行政機関の集まる福島1～4区・栄町（便宜上、以下「新福島」とする）以外の区域は明治以前から農村地帯（以下「旧福島」とする）であり、その意味で福島は二分されていた。さらに福島2区は旧八尾町の飛び地として百年以上の歴史があるが、駅前通りは昭和に入ってから開発が進んだ区域で、戦後に旧町部から移住してきた住民が多い。福島2区の通りと駅前通りは「新道」とよばれ、「風の盆」においてはたいへんな賑わいである。旧町部からの移住者は引っ越してきた当初はもともと住んでいた町内に「おわら」をしにいった



第3図 人口の推移
昭和20-45年 続八尾町史より
昭和50-60年 統計やつお'92より
山間部は6地区の平均



第4図 世帯数の推移
昭和20-45年 続八尾町史より
昭和50-60年 統計やつお'92より
山間部は6地区の平均

が、福島でやってみてはどうかということで、昭和24年に同好会が結成された。同好会は旧町部からの移住者や旧町部在住者に指導を受け、駅前通りを利用して「おわら」を披露した。当初はこのように福島独自に活動していたが、昭和30年に「おわら保存会福島支部」として活動するように

なり、「風の盆」にも参加するようになった。

「おわら保存会福島支部」は福島全域の住民を対象に組織されているが、実際に会費を納入して主体的に活動しているのは新福島である。「風の盆」でも雪洞は新福島と十三石橋にだけ設置されるから、区分けは明瞭であり、旧町部の伝統を引き継ぐ新福島と平野部の農村地帯としての地域性を引き継ぐ旧福島との境界が顕在化する。

地域的拡大を示すもうひとつの事例として競演会場の移転がある。昭和10年から旧町部のランドマーク的存在である聞名寺で行なわれてきた競演会は、昭和36年卯花地区（山間部に属する）にある八尾小学校グラウンドに場所を移した。聞名寺の境内では年々増加する見物人を収容しきれないという理由から、移転が行なわれたのである。八尾小学校は行政区画上是卯花地区にあたるわけだが、別荘川を渡らずに行ける場所であり、また旧町部の児童はこの小学校に通っているため、旧町部の住民もこの移転に関しては特別違和感や抵抗感はなかったと考える。

(5) 分割期——地域的分断と町内のおわらチームの細分化

昭和40年代高度成長期と共に始まり、昭和50年代前半（前夜祭が始まる前まで）の時期にあたる。八尾町全体で考えれば、全国的な高度成長の波を受けて平野部の発展と山間部の過疎化が進むなかで、旧町部と近隣地区との関係が大きく変化した。また、旧町部のみに注目してみると、町内ごとのおわらチームの性別・年齢階梯に基づく細分化が定着した時期にあたる。開放期に参加対象者の範囲を広げ、空間的にも拡大した「風の盆」は、分割という新しい動きを迎えることによって組織化され、社会の変化に対応していくのである。さらに、展開期に急激に変化して以来、さして変わることのなかった「おわら」は、町内のおわらチームの年齢階梯制が確立し、人口減少が進むことによって、却って新たな創造を試みる。

①人口・世帯数の変化とその背景

分割期は平野部の成長と山間部の過疎化という変化に特徴づけられている。昭和40年から50年代前半までの人口と世帯数の変化を見よう（第3図、第4図）。

山間部では町村合併後の減少が継続し、50年代には下げ止まりを迎えている。人口流出の影響は

40年代に顕在化しており、山間部集落の自助機構である「結」の消滅、人口不足・経済的理由による集落の廃絶、地場産業の急激な衰退が過疎化の急激な進行を物語っている。一方、平野部ではこの期間、人口・世帯数とも急増し、昭和45・50年には減少傾向にある旧町部を追い抜いた。

山口素光氏は山間部のうちで最も平野部から離れている大長谷地区における挙家離村者のアンケート調査を行なって過疎化の背景を探っている⁹⁾。それによると最も深刻なのは地元の雇用機会の少なさや地元産業の将来性への不安といった経済的理由である。その次に冬が長くて雪が多い苛酷な自然条件が離村理由としてあげられた。転出先は八尾町内が40.9%でもっとも多く、ついで27.3%が富山市へ移転している。このことから総じて富山平野方面へと人口移動が進行したと考えられる。従来は自給自足で生活できたが、高度成長の時代を迎えて兼業をしたり農閑期に県内各地へ出稼ぎに行くようになった。ところが山間部は冬期間（＝農閑期）の移動は難しく、通勤圏外になってしまう。その点、平野部は職場や出稼ぎ先に近いうえに、道路や鉄道が整備されていて交通が便利である。山間部の道路舗装が進んでも結局「引越し道路」となってしまった。

それから、従来から変わらない苛酷な自然条件がここへきてなぜ主な離村理由になるかという点、都市的生活様式の浸透が却って住民の欲求水準を引き上げて日常生活の不便さを増幅させているため、と山口氏は指摘している。また、いったん人口が流出しはじめると、それまで共同生活をしてきたからこそ苛酷な自然の中で生存可能だったという前提が崩れてさらに挙家離村を拡大させ、大長谷地区内の集落をつぎつぎに廃絶へと駆り立てる循環を生んだ。

都市的生活様式の浸透が欲求水準を上昇させるから却って日常生活の不便さを増幅させるというのはこの時期における旧町部の人口・世帯数の減少の背景ともなっている。たとえばモータリゼーションの急激な浸透によって舗装道路の整備が進んだが、昔ながらの町並みを残す旧町部では駐車スペースが限られているため平野部へ移動するケースが多い。また、生活様式の変化は住民の行動の範囲・選択肢を広げた一方で、伝統的な町内付き合いや行事の運営を負担に感じさせ、旧町部

から離れる原因ともなった。

②地域の分断——旧町部や「風の盆」に対する近隣地区住民の反発・無関心

このような社会環境の変化の中で、旧町部と近隣地区との関係は大きく変化した。

昭和40年ごろまでは和紙や養蚕などの地場産業を背景として、山間部と旧町部の経済的交流があった。また、町の生活に憧れ、親戚に再会できるという理由から、「風の盆」に行くのを楽しみにしていた。

しかし、昭和40年頃を境として、平野部の人口流出が地場産業の衰退に拍車をかけ、山間部に残った住民も平野部のスーパーマーケットに買物に行くようになって、以前のような経済的交流はなくなってしまった。週に一回は買物や所用で下(シモ=旧町部・平野部)に下りるので必然的に町の生活への憧れはなくなり、旧町部自体も人口減少が進み、弱体化の傾向にあったため、経済・交通・文化の中心ではなくなってしまった。

近隣地区の住民にとって「風の盆」は、年に数少ない休養と娯楽の日であったがこのような受動的な関わりばかりではなく、歌い手の少ない町に助人として主体的に参加していた事実もある。それが、旧町部との関係が変化するにつれて昭和40年頃から停滞し始め、近隣地区・旧町部間の溝が深まってしまった。

(6) 活用期——芸能・祭りの機能を生かした地域活性化の試み

前夜祭が行なわれるようになった昭和50年代後半から平成5年現在にかけての時期にあたる。祭りや郷土芸能が地域のアイデンティティを形成する作用(機能)を持つという認識に立ち、その機能を地域活性化につなげようという戦略的な指向を特徴とする。

その試みは、形成期から分割期にわたって醸成されてきた「風の盆」・「おわら」の魅力、そして環境の変化に適応するプロセスで生み出されてきた仕組みの機能を巧みに活用しながら進められている。従来は経済状況や社会環境・体制の変化・暮らしの知恵といった外的要因が、「おわら」や「風の盆」に影響を与え続け、町民の意識にしみ込んでいった。活用期ではそれが逆転して、「風の盆」・「おわら」そのものが町づくりのコンセプトや人々の行動に影響を与えるようになって

たのである。

①「おわら」の似合う町並み

昭和62年のHOPE計画の策定にも明らかのように、活用期では「風の盆」・「おわら」を町づくりのコンセプトの中に生かしていこうという姿勢が見られる。ここではHOPE計画について踏み込んだ検討は行なわないが、「八尾町 魅力ある町づくり基本計画(抜粋)」の中で掲げられている整備方針のテーマは『「おわら風の盆」「曳山」にふさわしい町づくり』である。このテーマにそった整備方針およびデザインコンセプトの展開として、

- (1) 家並みの連続性の向上=景観要素の共通仕様化(戸、外壁、建物の高さ、車庫シャッター、生け垣など)
 - (2) 歴史が見える景観整備=石垣、親水空間、緑量の確保、エンナカの活用
 - (3) おわらの演奏・踊りの町回りが出来るたまたまの醸成=輪踊りスペースの確保、道路整備上の工夫
 - (4) 楽しい雰囲気を持つ歩行空間の創出
- というような内容を持っている。

実際に町を歩いてみると、「おわら」をモチーフにしたものが点在していることに気付く。例えば、井田川にかかる禅寺橋(平成5年に竣工)は、欄干に「おわら」のレリーフを施し、中央に踊り場を設け、編笠を模した街灯を立てている。改築が進む八尾小学校も、屋根を編笠型にしており、校舎からグラウンドに下る観覧席の階段では多くの観光客が競演会を見物していた。平野部に位置する越中八尾駅の陸橋にも、山間部に位置する正間トンネルにも「おわら」がデザインされている。

連続的な町並みとして、「おわら」を意識しながら整備がすすめられているのは、「日本の道百選」に選ばれた諏訪町とその延長上にある東新町である。両町内ではここ数年の間に道路が石畳風に舗装され、電線も地下に埋設された。昭和60年ごろからは古い町並みを演出しようと改装する家も多い。諏訪町の前夜祭では区長(町内会長にあたる)があいさつの中でこの通りが「日本の道百選」に選ばれたこと、雪洞が整然と並ぶように工夫を重ねたことに言及したことからもわかるように、このような町並み整備は現在の諏訪町を特徴

づける大きな要素なのである。この町並み整備のおかげでかつてはひっそりとしていた諏訪町が最近では観光客で賑わうようになってしまったほどである。

以上は恒久的な建築物についてだが、平成5年福島は「風の盆」のときだけ沿道に設置する雪洞がもたらす社会的機能を活用した。福島が照明器具として雪洞のみを使う方針を固めたのはそれまで使っていた公告灯は落下の危険性があるからだけではない。各人（家）が自分の手で雪洞の枠に紙を貼って家の前に立てるという作業を通じて「風の盆」や「おわら」に対する意識を高めるねらいがあったのだ。福島は旧町部の各町内と違って大勢で多様な住民を抱えているため「風の盆」に対する意識が低く結束力に欠けるという現状を憂慮してこのような方針をとったのである。目論見どおりの効果が顕れるかどうかはしばらく待たねば分からないが、このような発想こそ活用期を象徴しているのではないだろうか。

②住民の連帯

旧町部と近隣地区との溝は分割期を経て深くなってしまった。そこで八尾町民としての連帯感を育てようと始められたのがおわらナイトにおける婦人会の参加である。

第1回目である平成4年は、連合婦人会（全町対象）に加盟している地区から延べ593人の婦人が参加した。これらの婦人は踊りを披露するために婦人学級（町が推進している社会教育活動）の踊り方教室でおわら保存会本部による指導を受けた。参加した婦人たちの感想は「旧町にきて踊ると楽しい」「こういう機会がないと踊れない」「全町のおわらにしたい」という積極的なものが多かったが、中には「中学・高校で習ったり、国体のマスゲームにも出たので踊りは知っているのに、旧町部の人たちはおわらは自分たちのものだという意識があるから、近隣地区から参加した婦人の踊りに対して、手つきがどうか、本当のおわらでないとか批判している。そういうのを聞くと参加する気がなくなる。」という否定的な声もあった。

住民の連帯を推進するために、「おわら」でも比較的身に付けやすい踊り部門を活用しているわけだが、そのプロセスにおいて、分割期に植え付けられてしまった近隣地区・旧町部双方のセク

ショナリズムの意識をどれだけ払拭できるかが鍵であろう。

「おわら」を全町民に普及させ充実させていこうという試みは、行政の社会教育の領域でもなされている。婦人学級でおわら教室を開催しているのもその一例だが、平成3年に町の生涯教育課が町章と町花をあしらった衣装を揃えるようになったのも画期的である。祭りの衣装は対外的には各人の所属を表し、その意匠を競うものであるが、町としての衣装の整備は「風の盆」・「おわら」は平野部・山間部も含めた八尾町全域のものだという求心的なメッセージを発しているのである。

4. 住民の地域に対する愛着

(1) 歴史と創造性を基盤とする住民の意思とその実現

以上、「風の盆」において顕在化する空間秩序と社会関係に注目しながら、八尾町のダイナミズムに映しだされた愛着の形成と変容過程を追った。もう一度簡潔に整理してみると、まず、形成期では、旧八尾町が物理的な空間構造・社会組織として形成され、空間認識の基礎が出来上がった。また、「風の盆」の始まりは町の起源と密接に関係しているから、町への帰属意識が確立したといえる。同時に「風の盆」の舞台装置が整えられていくことで旧町部と近隣地区の境界の意識化が進行した。

次に展開期では「おわら」が洗練されることで郷土芸能としての固有性が確立され、社会変動に対する適応力が獲得された。また、競演会開催や町内行動の始まりは、見せる側面の意識化・町内への帰属意識の萌芽を促し、「風の盆」は都市祭礼として成熟した。そして、これは戦後の開放化における秩序の基盤となったのである。

形成期・展開期の後、安定期には「風の盆」は祭り空間として整った形で行なわれた。

戦後になって開放期に入るとそれまでの社会階層・性別・年齢・居住地区の枠が外れて参加対象者の拡大がおこり、また祭礼空間も拡大された。開放化は性別・年齢・居住地区による帰属意識・境界の重層化を伴って進んだ。

帰属意識・境界の重層構造は、開放期に続く分割期において社会環境の変化に伴う地域的分断に

よって意識化された。一方「おわら」に関しては、洗練の結果を土台として演技集団の細分化が進んだ。洗練によって獲得された適応力・柔軟性が発揮されたといえよう。

活用期では祭り・芸能の機能を地域活性化に活用することで全町を対象とした意識的・戦略的な愛着の形成の試みがなされている。

以上の考察から、住民の地域に対する愛着とは「ある特定の地域社会の成員としての意思」であることがわかった。それは、各個人の意思のみで成り立つものでなく、歴史的に醸成された空間構造・仕組み・価値観・社会的な仕組みなどの基盤の上に立っており、同時に創造性に富んでいてその時々の変化に適応していく柔軟性を備えている。このように、過去から現在につながる歴史と、それを未来へつなげる創造性とが愛着の実相を形作っているのである。

(2) もうひとつの生活空間

現地調査を進めていくうちに、祭りはさらに祭り空間そのものとは別の「もうひとつの生活空間」を創出することがわかった。「もうひとつの生活空間」とは、例えば年間を通して行なわれる稽古の場、運営にあたっての会合、雪洞や踊り場の設営過程、踊りの練習、「風の盆」の余韻が残る情景など、日常空間と非日常空間（祭り空間）の連結部分を指す。「風の盆」の最中には多くの家々が玄関先に椅子を出したりして休む場所をこしらえ人々のふれあいに一役買っているが、これも祭り空間と共在する「もうひとつの生活空間」といえよう。

非常に多くの「もうひとつの生活空間」が創出されるのは、「風の盆」が民謡の祭典であることに由来していると筆者は考える。本来「おわら」は日常と非日常を転換させる「からくり」である。その転換過程で「もうひとつの生活空間」が創出されるのである。

しかも「おわら」は祭りを離れた日常でも民謡（郷土芸能）として独自に存在している。たとえば「風の盆」が終わり、中秋を迎えると「おわら」の愛好者は観月会と称して城が山で月を愛でながら「おわら」を演奏する機会を持つのだが、これは日常世界と共在する「もうひとつの生活空間」といえよう。

このように、「おわら」が介在する「もうひとつ

の生活空間」は幅が広く、祭りに関しても日常に関しても大きな影響を与える。それだけに、個人の人生における選択肢を飛躍的に多くしさまざまな価値観をもたらした現代社会では、共同体を前提とした地域社会における「もうひとつの生活空間」に対しても地元の人々は多様な見方をしている。

「祭りは地表に展開された地域に意識上の奥行を与える」と述べたが、「もうひとつの生活空間」こそ、「奥行」の実態なのである。地域にとって祭りとは、愛着を実現する場であると同時に、日常と非日常をつなぐ「もうひとつの生活空間」を提供しているのである。そして、具体的な光景としてあらわれる「もうひとつの生活空間」は、最も分かりやすい形で愛着の実相を私たちに見せてくれるのである。

5. おわりに

本論文は祭りの歴史的な移り変りに注目し、住民の地域に対する愛着の形成と変容過程、実相を明らかにした。しかし、社会環境や地域住民の意識・生活様式の変化などを実証的にもりこむことが出来なかったことを反省している。特に、戦後になってから「風の盆」に主体的に参加するようになった福島は、伝統的には農村地帯であるが工業化や宅地化が進んでいる保内地区において旧町部化してきており、文化の伝播や地域社会のアイデンティティ獲得過程の視点からも興味深いにもかかわらず、十分な調査・検討が出来なかったのは心残りである。

謝辞

調査にあたっては、八尾町役場、商工会の職員の方々をはじめ、数えきれないほど多くの方にお世話になった。厚かましい質問や面倒なことをお願いしてご迷惑をかけたことをお詫びすると同時に、厚い感謝の意を表したい。

注

- 1) 『八尾消防組沿革史 自八尾町創立 至大正拾三年』などによる
- 2) 坂井誠一監修 (1973) 『八尾町史』 385頁
- 3) 富山県土木部建築住宅課編 (1983) 『住まいと町並み百年の歩み』 230頁
- 4) 大長谷郷土誌編集委員会 (1989) 『大長谷郷土誌』 1071～1074頁

文 献

- 有末 賢(1983) : 都市祭礼の重層的構造—佃・月島の祭祀組織の事例研究. 社会学評論, 132(33-4), 37-62.
- 内田忠賢 (1992) : 都市と祭り—高知『よさこい祭り』へのアプローチ(1)—, 高知大学教育学部研究報告第1部第45号, 1-15.
- 大長谷郷土誌編纂委員会 (1989) : 『大長谷郷土誌』 大長谷地区自治振興会, 1110P.
- 北日本新聞社編集局編 (1988) : 『越中おわら社会学』 北日本新聞社, 266P.
- 栗林佐知 (1987) : 『町の女性たち—富山県八尾町に暮らす女性のライフヒストリー—』 富山大学人文学部卒業論文.
- 坂井誠一監修 (1967) : 『八尾町史』 八尾町役場.
———監修 (1973) : 『続八尾町史』 八尾町役場.

富山県土木部建築住宅課編 (1983) : 『住まいと街なみ百年のあゆみ』.

中村孚美 (1971) : 町と祭り—秋田県角館町の飾山はやしの場合. 日本民俗学, 77.

——— (1972) : 秩父祭り—都市の祭りの社会人類学. 季刊人類学 3-4, 149-190.

——— (1988) : (松平; 現代祝祭都市の構成—高時阿波おどりに対する) コメント. 季刊人類学 19-2, 236-239.

米山俊直 (1972) : (中村; 秩父祭り—都市の祭りの社会人類学に対する) コメント. 季刊人類学 3-4, 191-192.

成瀬昌示編 (1993) : 『越中八尾細把』 言叢社, 230P.

松平 誠 (1988) : 現代祝祭都市の構成—高門寺阿波おどり—. 季刊人類学 19-2, 149-236.

松平誠・松平ゼミナール (1978) : 都市の社会集団・I. 応用社会学研究, 立教大学社会学部, 79-131.

———・——— (1979) : 都市の社会集団・II. 応用社会学研究, 立教大学社会学部, 177-241.

———・——— (1982) : 都市の社会集団・III. 応用社会学研究, 立教大学社会学部, 139-183.

松本駒次郎 (1927) : 『八尾史談』 松六商店.

森田三郎 (1990) : 『祭りの文化人類学』 世界思想社, 194P.

Resident's Affection toward Yatsuo Town Reflected on a Local Festival "Kaze no bon"
Yoko NAGAO